

## 研究報告

# 第2子妊娠から出産後1歳半までにおける 母親の第1子に対する認知と対応 —地方都市Y市に在住する母親へのインタビュー調査—

Recognition of Response to the First Child aged 1 year and above, by Mothers Pregnant with a  
Second Child : "Interviews of Mothers Living in the Rural Y City"

穴吹絵美<sup>1)</sup>, 川崎佳代子<sup>2)</sup>, 曾我部美恵子<sup>2)</sup>, 子安恵子<sup>2)</sup>

1) 大阪府済生会 野江病院 (社会福祉法人 恩寵財団)

2) 関西看護医療大学 看護学部 母性・助産学領域

Emi Anabuki<sup>1)</sup>, Kayoko Kawasaki<sup>2)</sup>, Mieko Sokabe<sup>2)</sup>, Keiko Koyasu<sup>2)</sup>

1) NOE HOSPITAL

2) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Maternity Nursing and Midwifery

**研究目的**：第2子妊娠から出産を経て、退院後3カ月以上1年半頃までの各時期における、第1子が示した反応に対する母親の認知、対応、欲しかった支援を明らかにする。**方法**：研究デザイン：質的帰納的研究（半構成的面接）。**対象**：B地域在住の、幼児期の第1子を持ち、第2子出産後3か月から1年半頃までの時期にある女性で、子育て学習センターに来所され、研究への承諾の得られた11名。**倫理的配慮**：倫理審査委員会の承認を得てその基準に従って実施。**分析**：質的帰納法。**結果・考察**：母親の年齢は25歳から37歳で、平均年齢は32.9歳であった。第1子の年齢は1歳11ヶ月から5歳11ヶ月で、平均年齢は3歳0ヶ月であり、性別は男児が4名、女児が7名であった。対象者が語った内容を分析した結果、「第1子の示した反応に対する母親の認知」では8個のカテゴリーと18個のサブカテゴリー、「第1子の示した反応に対する母親の対応」では5個のカテゴリーと11個のサブカテゴリー、「欲しかった支援」では2個のカテゴリーと4個のサブカテゴリーが抽出された。研究協力者は、第2子の同胞葛藤に関してよく理解できておらず、専門的な知識の提供を望み、退院してからも困った時に対応してもらえる相談者や場所を望んでいた。臨床でも経産婦は育児の経験があるから大丈夫と捉えるのではなく、2児の育児を行う上での専門的情報提供を密に行い、地域でも相談できる人や場所、保育を支援する等の支援が必要があると考えられた。

**キーワード**：第2子妊娠、第1子の反応、母親、認知、対応、欲しい支援

**Keywords**：Second pregnancy, Reaction of the first child, Mother, Cognition, Response

## I. はじめに

臨床や地域の現場において、指導・教育プログラムは初産婦へ向けた内容が中心に行われることが多く、経産婦は一度経験していることを前提にしてあまり問題ない存在として扱われることが多い。しかし寺村(2012)は、「経産婦のうちの約60%が、“上の子どものこと”に対する不安を訴えた」ことを報告し、野嶋(1996)も、「上の子の乳児に対する嫉妬や、大人への注意獲得行動として表出される行動や感情に、両親が敏感に対応することの重要性」について述べており、経産婦であっても、次子の母になったという役割獲得過程において、ケアニードをもつ対象者であることを忘れてはならないと考える。

その他先行研究を概観すると、第2子誕生に伴う第1子の示す同胞葛藤や反応に関して、天富ら(1981)による「第2子出生によって91.6%の第1子に何らかの変化が生じ、1-2歳では退行的反応、攻撃的反応が大きく、年齢が長ずるにつれ適応的反応が多くなる傾向がある」の報告や、天富(1984)による「第1子にとって次子の出生は人生初めて遭遇する一大危機ともいえるストレスフルな状況を意味し、地位を脅かされる不安の下に置かれ、元の依存関係へ情緒的に退行したり、不満の陰性感情を未統制のまま多彩に表現する」などの報告がある。さらに同胞葛藤や退行現象以外の変化についても、「成長が促される、母親へのいたわり等の適応的現象もみられる」(保田, 2004; 小島ら, 2001)など、第2子誕生に伴う第1子の示す反応に関してはすでに多数の報告が行われている。

一方、「母親を中心とする家族の認知と対応」に関しては、第2子が誕生し、二人の子どもの育児にかかわる母親は、「子どもが一人であったときとは質的に異なるストレスを経験している」(小島, 2007)、第2子の誕生により母親から第1子への禁止行動が増え、遊びや注視が減少する(Dunnら, 1980)などの報告がある。天富(1984)は、「第1子が示す態度は、親の養育態度と関連が深い」と述べ、保田ら(2011)は、「第2子以上を出産した母親の育児における不安や心配では、出生直後から産後1ヶ月では「上の子との関係」が多くあげられ、4ヶ月では減少する。よって第1

子の関係や対応に関する母親の心配については、特に、「2児の育児が実際に始まる第2子出生直後から産後1ヶ月までを機軸にした支援の強化が重要である」と述べている。

出産入院時の対応に関しては、経産婦321人に対して行った2回の調査(天富ら, 1981)で、「出産入院時に、85%の母親が長子のことで何らかの心配をした、92.2%の母親が、入院時の分離に際して上の子に次子の出産を赤ちゃんについて知らせた、入院分離中の子どもは過半数が実家など他家に預けられている」ことを報告している。深澤ら(2013)は、「きょうだい関係は第1子が第2子の存在に気付く妊娠期から形成される」「葛藤を受けとめてもらえなかった第1子は葛藤が未処理のままとなり、第2子の存在を受け止められないままに、第2子に怒りや敵愾心を抱いたり、心理的な問題を抱えることになる」と述べ、妊娠期からの第1子への母親の関わりや、適切な関わりを受けられなかった第1子の危機について指摘した。

以上、先行研究を概観して、日本では第2子誕生に伴って生じる看護の課題に関して、主に第1子の反応に焦点を当てて研究が行われ、第1子の示す同胞葛藤や退行現象等のストレス反応については多くの成果が示されている(天富ら, 1981; 小島ら, 2001; 保田, 2004; 深澤ら, 2013)。一方、出産後の全時期で、「経産婦の不安の内容の一位に“上の子どものこと”が上がっている」(寺村, 2012)という報告や、「第2子を出産した母親は、子どもが一人の時とは質的に異なるストレスを体験している」(小島, 2007)という報告があるにもかかわらず、第2子の妊娠によって母親自身が第1子の反応をどの時期に、どうとらえ、どう対処しているのかについてなど、臨床現場で第2子を妊娠・出産する母親への指導に生かせる研究成果が少ないことがわかった。

そこで本研究においては、第2子妊娠から出産を経て、退院後3ヶ月以上1年半頃までの各時期における、第1子が示した反応に対する母親の認知、対応、欲しかった支援を明らかにしたいと考えたものである。母親の分娩入院中の時期を加えたのは、妊娠中に、母親が第2子を妊娠したことによって、第1子が何らかの不安を感じている延

長線上で母親の分娩入院による母子分離を経験する第1子の状況を考えると、本研究において分娩入院中も重要な意味をもつと考えたからである。

第1子	第1子の危機：親に葛藤を受け止められず葛藤を未処理のままにする→第1子に怒りや敵愾心・心理課題が残る		
	母親の妊娠を知る・気づく→反応する	母親との分離・現実の第2子の存在を知る→反応する	第2子の存在によって母親の愛情に対する危機を感じる→反応する
母親	第1子の反応を認知する→対応する		
	ケアの目標：母親が第1子の示す葛藤から目を背けず第1子の葛藤を受け入れる		
	妊娠期	出産期	産褥・育児期

本研究の主焦点

図1 本研究の概念枠組み

本研究の概念枠組みは図1に示した。今回の研究テーマは第2子出産という共通の体験によって、どの母親でも感じる戸惑いやその背景にある対処能力に焦点を当てているので、研究協力者の居住地の影響は少ないと考えられるが研究対象者の居住地の特徴を簡単に上げると次のようになる。

Y市は、南北を大動脈の自動車道で結ぶ地方都市である。気候は温暖で、自然豊かな海で囲まれていて、観光資源にも恵まれている。中心になる産業は一次産業である農業と漁業である。人口は約45,000人、年間出生数315人、出生率は、高齢者率が高い人口構成の影響もあって、全国8.0に対し、6.1と低く、合計特殊出生率も、全国1.39に対して1.37とやや低い傾向を示している。家族構成の特徴として核家族が少なく、拡大家族が多い（全国：拡大家族6.6%、核家族60.1%に対しB市は前者54.9%、後31.4%）、人口構成において、老年人口が多く、生産人口・年少人口は少ない（全国：老年人口25.1%、生産年齢人口62%、年少人口12.8%に対し、B市は、34.7%、54.3%、11.0%）という特徴がある。

## II. 目的

第2子妊娠から出産を経て、退院後3カ月以上1年半頃までの各時期における、第1子が示した反応に対する母親の認知、対応、欲しかった支援を明らかにする。

## III. 方法

### 1. 研究デザイン：質的記述的研究（半構成的面接）

インタビューは、「1～4の質問について、妊娠中、分娩で入院されている間、退院後から今までの各時期について伺います」という形で始め、下記1～4のインタビューガイドに沿って質問し、過去の体験の語りから、第2子妊娠時～出産後1年半頃までに第1子が示した反応と母親の認知・対応・欲しかった支援等を探求することとした。

1. 第1子はどのような反応を示しましたか。
2. 第1子が示した反応に対しお母様はどのようにとらえ、意味づけしていましたか。
3. 第1子が示した反応にどのように対応されましたか。
4. 全体の流れを通して、第1子が示した反応についてのとらえ方や意味づけ、対応を振り返ってみて感じることを、必要だった情報や欲しかった知識・支援を教えてください。

### 2. 研究協力者

B地域在住の2回経産婦。幼児期の第1子を持ち、第2子出産後3か月から1年半頃までの時期にある女性で、子育て学習センターに来所され、研究への承諾の得られた方11名。

出産後3か月からとしたのは、寺村（2012）による研究で、「育児上の悩みの内容（不安や困難と感ずる内容）は、産後の時間経過に伴って変化する。初産婦と経産婦の間でも悩みのピークは異なっており、初産婦が生後1～2カ月未満なのに対し、経産婦は3カ月未満である。そして生後8カ月頃まで継続する経産婦の悩みの中心は、「上の子どものこと」である」と報告されているためである。

1年半の範囲としたのは、Kreppner K（1988）により、「第2子を家族に迎えた生活が軌道に乗り、1つのシステムとして家族が新しい構造を形づくって行くには、1年以上の時間が必要」と述べられているためである。また、「母親役割は、予期的、形式的、非形式的段階を経て、1年以内に、母親役割獲得の最終地点である個人的段階に移行する」（Mercer, 2000；大西, 2008）というプロセスを提示する理論的枠組みに沿って、余裕を取って1.5年間の範囲とした。

子育て学習センターとはB市の教育委員会が運営しており子どもの遊具が揃っている安全な場所で、育児中の親子が自由に入出入りし、子どもを遊ばせたり、親同士がコミュニケーションをしたりできる場所になっていて、子育て相談や子育てサークル、ボランティアの育成などの事業等様々なイベントも提供している場所である。

### 3. 面接場所

面接場所は、研究協力者の希望に合わせて子育て学習センター内にある個室で行った。

### 4. データ収集に至る過程

- 1) 子育て学習センター来所時に、10分程度の説明の時間をいただき、研究の概略、倫理的配慮を説明し、協力してくださる方を募集し、応募していただいた方に、文書ならびに口頭で、調査の目的・意義、方法（特に、面接内容についてはICレコーダーに録音させていただき、分析してデータとして用いることの了承を得る）、調査時に守るべきことを倫理基準に従って説明した。承諾が得られたら、研究協力者の予定に合わせて、調査実施日の日時と場所を確認し、依頼した。
- 2) 面接実施時は、研究説明に10分取り、面接時間は一人約40分程度とした。面接は半構成面接とし、面接内容については、ICレコーダーに録音させていただき、分析対象にすることを研究協力者に説明し了解を得て実施した。
- 3) 面接時には答えを誘導するような質問や態度はせず、自由に話してもらい、話の流れを変えないように気を付けながら疑問や関心の点について質問をしてさらに詳しく語っていただいた。

### 5. 研究期間：平成27年7月30日～9月30日

### 6. 倫理的配慮

大学の倫理審査委員会承認を得て、研究の安全性の確保、プライバシー保護のための配慮、インフォームドコンセントの方法、個人情報・資料・データ等の管理保護等すべて倫理審査委員会の認定内容を遵守して行った。

### 7. 分析方法

下にきょうだいが生れることは上の子どもにとって、今までの自分の存在がおびやかされるような大きな出来事であり、不安や不快感を感じたり、葛藤が生まれる出来事でもあるので、行動や態度にさまざまな変化が生じることになる。それに対して多くの母親がその子供が示す意味や対処方法がわからず、戸惑うことが多い。今回の研究は、どの母親でも感じるそのような戸惑いやその背景にある対処能力に焦点を当て、専門職として第2子を迎え入れる母親（家族）の適切な対応につながる支援を検討することにある。従って、データ分析は、質的帰納的方法によって、分析手順は下記のように行った。

- 1) 第1子がいて次子を出産したという同じ経験をしている中で感じている母親の気持ちや対処方法、欲しかった支援などを語ってもらった。
- 2) ICレコーダーに録音したデータを逐語的に起こし、語った内容を、妊娠期及び分娩入院による第1子との分離時、退院した後の時期別に分類した。
- 3) 第1子が示した反応に対する母親の認知・対応、欲しかった知識や支援等、半構造化質問と関係のある文脈を取り出し、どのような思いや体験から生じたものか、その背景を考慮しながらその意味内容をコード化した。
- 4) コード化した文章を相違性および類似性に留意しながら比較検討し、類似するコードをまとめてサブカテゴリーを生成し、さらに、サブカテゴリーの相違性および類似性に留意しながら比較検討し、類似するサブカテゴリーを集めてカテゴリーを生成していった。
- 5) データの信頼性と妥当性を高めるための措置として、
  - ①記述したデータは、生データとコード、サブカテゴリー、カテゴリーは同じ表で可視可能な状態に維持しながら、各事例ごとに指導教員と分析の検討を行った。
  - ②さらに別の質的研究者である教員のスーパーバイズを受けた。
  - ③さらに11人分を統合し、再カテゴリー化する過程で、別の質的研究者である教員2名からのスーパーバイズを受けた。

④カテゴリー生成後に、承諾の得られた研究協力者3名に内容の確認を行った。

## 8. 用語の定義

第1子：1番目に生まれた子供で性別は問わない

第2子：2番目に生まれた子供で性別は問わない

認知：母親が子どもの反応をどのようにとらえ、意味づけているかをいう。

反応：第2子の妊娠・誕生に応じて第1子に起こる現象、態度、状況とする。

対応：母親が、第1子の反応や状況に対して示す態度や行動をいう。

同胞葛藤：次子出生によって引き起こされる長子の葛藤状態。「否定的な反応のみでなく肯定的な反応も同胞葛藤」(天富, 1984; 深澤ら, 2013)と位置付けられており、本研究においても否定的な反応のみでなく、肯定的な反応も含めた次第2子出生によるすべての反応を含むものとする。

## IV. 結果

### 1. 研究協力者の概要 (表1)

対象は本研究への同意が得られた11名であり属性は表1に示した。母親の年齢は25歳から37歳で、平均年齢は32.9歳であった。第1子の年齢は1歳11ヶ月から5歳11ヶ月で、平均年齢は3歳0ヶ月であり、性別は男児が4名、女児が7名であった。第2子の年齢は4ヶ月から1歳5ヶ月で平均年齢は8.2ヶ月であり、性別は男児が5名女児が6名であった。家族形態は核家族が10名、複合家族が1名であった。託児の有無は2名が保育園を利用しており、就労状況は3名が仕事をもち現在育児休業利用中で、8名が専業主婦であった。面接時間は40分～60分であった。

対象者	母親 年齢	第1子		第2子		家族形態	託児 有無	就労 状況
		年齢	性別	月数	性別			
A	36歳	1歳11ヶ月	女	4ヶ月	男	核家族	無	無
B	31歳	3歳0ヶ月	女	10ヶ月	男	核家族	無	無
C	30歳	2歳10ヶ月	男	9ヶ月	女	核家族	無	無
D	36歳	5歳11ヶ月	女	1歳5ヶ月	女	核家族	有	育休中
E	33歳	3歳2ヶ月	女	5ヶ月	女	複合家族	無	無
F	37歳	4歳1ヶ月	男	1歳5ヶ月	女	核家族	有	育休中
G	28歳	2歳3ヶ月	男	4ヶ月	男	核家族	無	育休中
H	34歳	2歳5ヶ月	女	7ヶ月	男	核家族	無	無
I	37歳	2歳7ヶ月	男	6ヶ月	男	核家族	有	無
J	25歳	2歳8ヶ月	女	5ヶ月	女	核家族	無	無
K	35歳	2歳8ヶ月	女	7ヶ月	女	核家族	無	無
平均	32.9歳	3歳0ヶ月		8.2ヶ月				

表1 研究協力者の属性

### 2. 研究協力者が表現した第2子妊娠時から第2子出産退院後現在までに第1子が示した反応に対する母親の認知・対応、欲しかった支援

研究協力者が語った内容を分析した結果、『第1子の示した反応に対する母親の認知(表2)』では8個のカテゴリーと18個のサブカテゴリー、『第1子の示した反応に対する母親の対応(表3)』では5個のカテゴリーと11個のサブカテゴリー、『欲しかった支援』では2個のカテゴリーと4個のサブカテゴリーが抽出された。以下、『第1子の示した反応に対する母親の認知』『第1子の示した反応に対する母親の対応』『欲しかった支援』の大きなテーマに沿って、それぞれのサブカテゴリーについてカテゴリーごとに説明する。【 】はカテゴリー、[ ]はサブカテゴリー、Data:「 」は研究協力者の語りを表す。事例には番号、人名にはアルファベットの記号を用いた。

#### 1) 第1子の示した反応に対する母親の認知(表2)

##### (1) 妊娠中

【I. 第2子の存在に対する理解は不明瞭だが、甘えと成長を感じた】

[なんとなく感じる不安による甘え]は、母親の妊娠というはっきりとはわからない現象に対する不安を感じた第1子の反応が、母親への甘えとして表現されたと感じる母親の思いを、[第2子が具体的にどんな存在なのかわかっていない]は、妊娠についての第1子の理解の程度は、不明瞭で正確に理解できていない、若しくは漠然とした理解、と感じている母親の思いを、[甘えと並行してとっ

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	データ
妊娠中	Ⅰ. 第2子の存在に対する理解は不明瞭だが、甘えと成長を感じた	1. なんとなく感じる不安による甘え	「妊娠の初期から甘えが強くなり今まで以上に何でもママにしてほしいという感じになった」「甘えが強くなったことに対しては何か察しているのかなと思った」「生まれるひと月前に甘えがひどくなり、一時期すごい精神的に不安定で乱れた」
		2. 第2子が具体的にどんな存在なのかわかっていない	「妹ができることは伝えていたが、あまりわかっていなかった」「なんとなくわかってるような、わかっていないような」「赤ちゃんがおることもわかってるのかどうか」
		3. 甘えと並行してとった上の子らしい行動	「妊娠中甘えも出たけどそれと一緒にずっと赤ちゃんをすごい楽しみにしていて、お腹に話しかけてくれたり、おむつ替えてあげるねとか、ミルクを私があげるねとか、すごいお姉ちゃんおねえちゃんって感じで。」
	Ⅱ. 母親に甘えられないための我慢やストレス反応をみてつらかった	1. 甘えられないと起こるストレス反応を見て落ちこんだ	「目をぎゅっと閉じるようになったのを見て、2人目ができることはこの子にとってそんなにストレスを与えているのかと思いき、私が落ち込んだ」「妊娠中寂しい思いをさせたストレスから爪をかむようになって落ち込んだ」
		2. 母親への甘えを我慢する反応に対する申し訳ない思い	「妊娠中甘えが強くなった時はいつも元気な子やのに悲しい表情をするから甘えに対して「甘えん」とは言えなかったです」「相手できないときはしょぼんとして一緒に横に転がって本当に可哀想だった」
	Ⅲ. かまってもやれない第1子を心配し全部受け入れようと思った。	1. 妊娠中は第1子の気持ちを全部受け入れようと思った	「下の子ができるのは私たちの都合なので上の子に寂しい思いをさせるのは可哀想と思った」「妊娠中はもう甘えさせようとお腹の子より上の子優先で接した」「妊娠中は上の子の気持ちを配慮して全部受け入れようと思った」
2. 妊娠中は相手ができない第1子のことを一番心配していた		「妊娠中つわりがひどくて甘える上の子の相手が出来ず上の子のことを心配した」「つわりのときかまってあげられず上の子のことが一番心配でした」	
分娩入院中	Ⅳ. 第1子の第2子に対する理解・関心は低いと思った	1. 第2子への理解・関心は低いと思った	「面会時赤ちゃんにはそんなに反応を示さなかった」「下の子のことを分かっただけでおらず興味もなく嫉妬もなかった」「お兄ちゃんになることは妊娠中に話してたんやけど面会時下の子が誰なのか分かっただけでおらずキョトンとしてました」「面会時、妹のことが分かっているようで下の子に対して無関心だった」
		2. 理解・関心が低い理由は、わかっていないのか、やきもちなのか、我慢のせいなのか	「ヤキモチなんかな、わかってても分かってないようにしてたのか、全然触ろうともせず目も合わさずそっけなかったです。」「面会時無理を言わず嫉妬の様子を見せなかったのは気を張って我慢していたからだと思う」「下の子のことを分かっただけでせいと興味もなく嫉妬も示さなかった」
	Ⅴ. 入院中は離れて寂しい思いを示す第1子を優先しようと思った	1. 母親との分離のつらさを我慢していると思った	「面会時我慢して祖父母の言う事を聞いて帰っていく。でもお父さんと2人で来たときはやっぱりすごい我慢で祖父母に遠慮しているのが分かって可哀想で（涙を流しながら話される）」「面会后泣いて母親と別れるのがつらいようだった」
		2. 入院中は余裕もあつたので上の子を優先しようと思った	「面会時間はお兄ちゃんにあてて下の子の事は話さず上の子とだけ遊ぶ時間と決めた」「会えない分面会時にしっかり愛情をあげようという意識がありました」「経産婦なので保健指導が少なく自分にも余裕があつたので上の子優先に接しました」

表2 (1) 第1子の示した反応に対する母親の認知

た上の子らしい行動]は、妊娠中は、赤ちゃんが自分とどうかかわるのかはつきりはわからないままに、赤ちゃんができることを楽しみにしたり、周りから言われてお姉ちゃんになると受け止めた行動をとっていると理解している母親の心情を表す3つのサブテーマで構成され、第1子の、第2子の存在に対する理解は不明瞭だが、甘えと成長を感じたという母親の認知を表していた。

【Ⅱ. 母親に甘えられないための我慢やストレス反応をみてつらかった】

[甘えられないと起こるストレス反応を見て落ちこんだ]は、甘えられなくなったことからストレス様の反応を示す第1子に落ち込んで悩む母親の気持ちを、[母親への甘えを我慢する反応に対する申し訳ない思い]は、甘えられないで示す第1子の反応に申し訳ない思いを抱いている母親の心情を表す2つのサブカテゴリーで構成され、妊娠中お腹の子どものことを考えて思うようにかまってもやれなくなった母親に対する第1子のストレス反応や甘えを我慢している反応を見てつらい思い

を感じている母親の認知を表していた。

【Ⅲ. かまってやれない第1子を心配し全部受け入れようと思った】

〔妊娠中は第1子の気持ちを全部受け入れようと思った〕は、妊娠中は第1子の甘えや寂しい思いをすべて受け入れようと思っている母親の心情を、〔妊娠中は相手ができない第1子のことを一番心配していた〕は、妊娠中においては何よりも第1子が母親の気がかりであったことを表す2つのサブテーマで構成され、かまってやれない第1子を心配し全部受け入れようと思った母親の認知を表していた。

(2) 分娩入院中

【Ⅳ. 第1子の第2子に対する理解・関心は低いと思った】

〔第2子への理解・関心は低いと思った〕は、第1子が、妊娠中に話してあっても実際に第2子を見たときに理解・関心が低いと感じた母親の気持

ちを、〔理解・関心が低い理由は、わかっていないのか、やきもちなのか、我慢のせいかな〕は、関心を示さない理由については、わかっていない、やきもち、我慢のせいなどと推測している母親の気持ちを表す2つのサブカテゴリーで構成され、第1子の第2子に対する理解・関心が低い理由については母親なりの考えを示している認知を表していた。

【Ⅴ. 入院中は離れて寂しい思いを示す第1子を優先しようと思った】

〔母親との分離のつらさを我慢していると思った〕は面会時の第1子の反応から、第1子の心情について、分離によるつらい思いを我慢しているのだろうと考える母親の思いを、〔入院中は余裕もあったので上の子を優先しようと思った〕は、入院中には経産婦として余裕もあったのでともかく第1子優先に愛情をかけようと思う母親の心情を表す2つのサブカテゴリーで構成され、入院中は離れ

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	データ
退院後	Ⅵ. 我儘を中心とする予想外の第1子の反応に追い詰められる思い	1. 第1子の我儘にひどく追い込まれた	「もう何してもほんとにイヤイヤですね。どうしたらいいんでしょうね。」「センターに来るまでの2か月間は我儘がひどくて地獄のようでした」「2か月間は荒れ放題に荒れてました」
		2. 我儘、赤ちゃん返り、ストレスによる爪噛みなど予想外の反応に驚く	「出来ていたことが急にできなくなってぐずったり朝の着替えも出来なくなって驚いた」「上の子がストレスで爪を噛むようになってびっくりしました」「下の子に長時間かまった時に上の子が嫉妬するようになった」
		3. 第1子の我儘に対し自制できない自分に落ち込んだ	「我儘は聞けるときにできる限り聞くが精神状態によってはイライラして今まではしたことが無かったのに手が出てしまい落ち込みました」「精神的に余裕がないときは手が出てしまい虐待をするんじゃないかと怖くなった」「2人目が生まれてからカッとなって手が出ることもあり夜に自己嫌悪に陥った」
	Ⅶ. 第1子の精神（心理）状態は母親の愛情や関わり方で変化する	1. 第1子は母親の愛情不足を感じ、満たされない欲求を抱えている	「下の子が生まれるとやっぱり自分への愛情が少なくて感じるんでしょうね」「ストレスで爪を噛むようになり我儘を我慢している様子がみえた」「気を引こうとして悪いことをするように感じる」
		2. 第1子は母親の関わり次第で第2子への思いやりが生じる	「放っておくと弟のことが嫌いだけど、しっかり遊んであげたら弟を呼んだり物を渡して遊んだり弟への思いやりを示す」「かまってあげれば落ち着いているがかまってあげられない状態が続くと不穏になり、母親の状態で目に見えて違った」「上の子と遊んであげたりすると下が寝てたりしたら布団掛けてあげたりとか、お姉ちゃんらしくなって」
	Ⅷ. 2児の育児を両立できないジレンマ	1. 2児の育児は負担が重く難しい	「できるだけ抱っこしようと思っていたがやっぱりできなかった。お兄ちゃん待ってねとなってしまう。難しいですね」「子ども一人のときは違い一日がすごく早い。下の子の世話と家事で上の子どうしようという感じ」「忙しくしたまま夜になり、また赤ちゃんをあやしているとか何をやっているのかと落ち込む」
2. 2児の育児は中途半端で満足できない		「2人目は手をかけれていない部分があって下の子が可哀想と思うときがある」「2人に対しどちらも中途半端に感じ、育児がちゃんとできていないと毎日思う」	

表2 (2) 第1子の示した反応に対する母親の認知

て寂しい思いを示す第1子の気持ちを察し、優先して接しようとする母親の認知を表していた。

(3) 退院後

【VI. 我儘を中心とする予想外の第1子の反応に追い詰められる思い】

〔第1子の我儘にひどく追い込まれた〕は、第1子が示す余りにもひどい我儘に追い込まれた母親の心情を、〔我儘、赤ちゃん返り、ストレスによる爪

噛みなど予想外の反応に驚く〕は、第1子が退院後に示す様々な予想外の反応に驚かされた母親の心情を、〔第1子の我儘に対し自制できない自分に落ち込んだ〕は、第1子の示す余りにひどい我儘に、自身をコントロールできず、叩いたり怒鳴ったりしてしまい、情けない思いを感じている母親の心情を表す3つのサブカテゴリーで構成され、我儘を中心とするネガティブな反応に翻弄され追い込

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	データ
妊娠中	I. 第1子が第2子を受け入れるための対応	1. 第2子が生れることは伝えた	「赤ちゃんが生まれるよ、お姉ちゃんになるよと伝えた」「ママの子?という問いにママの子だけどE君の弟と伝えた」
		2. 赤ちゃんを受け入れてもらえるような働きかけ	「お腹に話しかけてあげてと言った」「一緒に健診に行き、エコーを見て、赤ちゃんがいることを伝えた」
		3. 第1子優先に甘えさせた	「妊娠中は、お兄ちゃん優先で甘えさせようと思った」「妊娠中は上の子を全部受け入れるように気をつけた」「できるだけ2人で過ごす時間を作った」
分娩入院中	II. 第2子の気持ちに配慮して寄り添う対応	1. 面会時は第1子優先で対応した	「面会時間はお兄ちゃんにあてる時間と決め、お兄ちゃん優先で対応した」「甘えについてはそのまま受け入れしっかり愛情を注ぐようにした」「お父さんと来たときはぎゅってしてごめんね。もうちょっと我慢してね>って言った」
		2. 分離のつらさに共感して対応した	「別れてつらかったことを今でも泣きながら言う事に対しては、<そうだね>って抱きしめてあげる」
退院後	III. 感情を抑えられない	1. 余裕がないときに手が出る	「我儘を聞けるときはできる限り聞けるが精神状態によってはイライラして、今までしたことは無かったが手が出てしまうことがあった」「精神的に余裕がないときに少しの我儘で叩いてしまつてふと我に返り謝る日々」
		2. イライラして怒鳴る	「自分がしんどくてイライラするから少しのことで上の子に怒鳴ってしまう」「余裕がなくて退行現象や我儘の爆発があり怒鳴ってしまった」
	IV. 愛情を注げるように工夫する	1. 上の子を安定させる働きかけ	「お手伝いをしてくれたときは大げさなくらいに褒めてくありがとう!>と言った」「下の子の世話を祖父母に頼んで上の子と2人でセンターに来た」「赤ちゃん返りの要望をきく」「抱っこしたり甘えさせてあげる」
		2. 二人の子どもにバランス良く接する	「夫と役割分担して自分が第2子を見るときは夫に第1子を見てもらった」「気をつけてるのは一人ぼっちにさせないように。下の子を見ながら上の子も。下の子を抱っこしながら上の子と一緒に踊ったりとか」「交互にちょっとずつ抱いていました」「私が下を見る時に主人が上を見ますよね、役割分担とか」
	V. どうかかわればよいかわからない	1. 負担が増えて手がかけられない	「お兄ちゃんに言い聞かせたりいろいろしてるけどやっぱり2人になると大変で難しい」「上の子が一人で遊んでるときは有難いって感じで悪いなと思いつつほつたらかし」「自分が甘えさせられてないのかなとか、足りてないのかなって思うしどっちもが中途半端になる」
2. 対処方法がわからない		「良い兄弟関係を構築するためには自分がどう対応すべきかわからない」「イヤイヤ期と嫉妬の見分け方と対処方法が分からず困った」「2人一緒に抱っこしてもお兄ちゃんはお兄ちゃんを置いて>って泣くしどうしたらいいか分からなくなる」「自分だけで考えても答えは出ないし合ってるかもわからないし。とりあえずその時落ち着く方法を探りながら」	

表3 第1子の示した反応に対する母親の対応



まれた母親のつらい認知を表していた。

【Ⅶ. 第1子の精神（心理）状態は母親の愛情や関わり方で変化する】

〔第1子は母親の愛情不足を感じ、満たされない欲求を抱えている〕は、第1子は、第2子の誕生によって、母親の愛情が少なくなっていることを感じ、ストレスを感じながら母親の気をひこうとする行動をとっているのだという母親の認知を、〔第1子は母親の関わり次第で第2子への思いやりが生じる〕は、母親が、第1子を可愛がったり、尊重することによって第2子への思いやりが生じるという認知を表す2つのサブカテゴリーで構成され、【第1子の精神（心理）状態は母親の愛情や関わり方で変化する】という母親の認知を表していた。

【Ⅷ. 2児の育児を両立できないジレンマ】

〔2児の育児は負担が重く難しい〕は、2児の育児は負担が重く思い通りにできず悩んでいる母親の心情を、〔2児の育児は中途半端で満足できない〕は、1人だけの時とは違い2人の育児は中途半端で満足できないと感じている母親の心情を表す2つのサブカテゴリーで構成され、思うようにいかず2児の育児を両立できないジレンマを感じている認知を表していた。

## 2) 第1子の示した反応に対する母親の対応（表3）

### (1) 妊娠中

【Ⅰ. 第1子が第2子を受け入れるための対応】

〔第2子が生まれることは伝えた〕は、ほとんどの母親は妊娠中から第1子に第2子が生まれる事を伝えていた対応を、〔赤ちゃんを受け入れてもらえるような働きかけ〕は、妊娠中から第1子が第2子を受け入れられるように働きかけている母親の対応を、〔第1子優先に甘えさせた〕は第1子を気にかけお腹の子より第1子を優先して愛情をかけようとする母親の対応を表す3つのサブカテゴリーで構成され、妊娠中に母親が行った第1子が第2子を受け入れるための対応を表していた。

### (2) 分娩入院中

【Ⅱ. 第1子の気持ちに配慮し寄り添う対応】

〔面会時は第1子優先で対応した〕は、上の子を配慮し優先して関わろうとしている母親の対応を、〔分離のつらさには共感して対応した〕は、

母親と別れて暮らすつらさを訴える第1子の気持ちを受け止め共感しようとする母親の対応を示す2つのサブカテゴリーで構成され、分娩入院中は母親と離れて寂しい思いを示す第1子の気持ちに共感し、第1子を優先して接しよう意識して行動に移していた母親の対応を表していた。

### (3) 退院後

【Ⅲ. 感情を抑えられない】

〔余裕がないときに手が出る〕は、精神的に余裕がない時に第1子を叩いて後悔する母親の対応を、〔イライラして怒鳴る〕は、精神的・身体的に余裕がなくなると、上の子を怒鳴ってしまう母親の対応を表す2つのサブカテゴリーで構成され、思わず叩いてしまったり怒鳴ったりする対応が示された。

【Ⅳ. 愛情を注げるように工夫する】

〔上の子を安定させる働きかけ〕は第1子を褒めて肯定したり、二人だけの時間を作っている母親の対応を、〔2人の子どもにバランスよく接する〕は2人の子どもに平等にバランス良く愛情を注ごうとしている母親の対応を表す2つのサブカテゴリーで構成され、第1子の気持ちに配慮して声をかけたり、2人の子どもに対して平等にバランス良く接しようとする母親の対応を表していた。

【Ⅴ. どう関わればいいのかわからない】

このカテゴリーは〔負担が増えて手がかけられない〕〔対処方法が分からない〕の2つのサブカテゴリーから構成され、〔負担が増えて手がかけられない〕は2児の育児に負担を感じ十分に手がかけられていない母親の対応を、〔対処方法が分からない〕は2児の育児により今までと環境が変わり、今後2人にどのように接していけばよいか分からず対処方法を模索している母親の対応を表す2つのサブカテゴリーで構成され、負担が増えて、十分手をかけてあげられず、どう対応していいかが分からないで困惑している対応を表していた。

### 3) 欲しかった支援

【Ⅰ. 専門的な知識を提供して欲しい】

〔専門的な知識を提供して欲しい〕は、経産婦であっても事前に専門職者から根拠に基づいた正しい情報提供が欲しかった気持ちを、〔地域でもっと育児情報を提供して欲しい〕は地域に戻ってか

らも、育児情報を得たり母親同士で意見交換できる経産婦向けの教室や場所が欲しい、2人の育児で困った時に気軽に知識を補充したいというニーズを表す2つのサブカテゴリーで構成され、出産前からの専門職者からの正しい知識提供や地域に帰ってからの育児情報が欲しかった状況を表していた。

【Ⅱ.気軽に相談出来て知識を得られる場所や保育の場所が欲しい】

〔遊びや保育の場所を提供して欲しい〕は、一時保育やもっと柔軟に対応してもらえる子育て学習センターなどの場所の提供を求めていること、〔折々に相談したい〕は、退院後の育児生活で困った時にいつでも気軽に相談ができる場所を求めていることを表す2つのサブテーマで構成され、地域で気軽に子どもを遊ばせられる場所や身近に育児サポートをしてもらえる支援がや悩みに対してその都度相談したいというニーズを表していた。

## V. 考察

### 1. 第1子の示した反応に対する母親の認知

妊娠中に示した第1子の示す反応に対する母親の認知について、【第2子の存在に対する理解は不明瞭だが、甘えと成長を感じた】に関連して、深澤ら(2013)は、「第1子に現れる退行や攻撃、赤ちゃん返りや肯定的反応などのすべての反応が葛藤の表れであり、すべての反応が自分を親に受け止めてもらいたいと願っている反応」なのだとして述べている。まだ第2子が現実的に存在しない妊娠の時期においてさえ、第1子は漠然とした不安を感じている状況を示していることを母親も認知していた。母親が、第1子が示す反応を、第1子なりに今の状況を受け止めようと努力している証であることとらえることで、母親の対処は違ってくると思われ、これらに関する知識を母親に持ってもらうことの重要性を再認識させられた。〔具体的にどんな存在なのかわかっていない〕に関して、「妊娠を知らされた時の第1子の理解は、3歳未満の年齢が低い群は反応が不明瞭で正確に理解できないケースが多く、年齢が上がるにつれて受容的な反応が多くなる」(大月ら, 2002a; 小島ら, 2003; 天富ら, 1981)の報告があり、本研究協力者の第1子の年齢がほとんど3歳未満であったこ

とが関係していることが考えられた。

【母親に甘えられないための我慢やストレス反応をみてつらかった】のカテゴリーは、第1子が示すようになった目をぎゅっと閉じるようにする反応や、爪をかむようになった反応を見て落ち込む気持ちや、母親がお腹の子をかばって無理が出来なくなり、第1子に対して思うように相手ができなくなったことで、我慢しなければならなくなった第1子が示す反応をみて、母親自身が落ち込むつらい思いを表していた。先行研究では第1子が示す反応に関する研究は行われているものの、そういう反応に対して母親がどう認知しているかに焦点を当てた研究は見当たらず、第1子の示す反応に対して妊娠中から母親がつらい思いをしているという貴重な結果が得られた。助産師として、妊婦に関わる時に忘れてはならないことであると思われた。【かまってやれない第1子を心配し全部受け入れようと思った】に関しては、第2子妊娠中の母親は、「まだ見ぬ胎児より<生活の中心は第1子>に関する話題が中心」(磯山, 2010)、「第2子の胎児よりも第1子を気にかけて7割以上の母親が退行現象を心配していた」(磯山, 2014)と論じられていた内容と同様であった。

母親の分娩入院中に第1子の示した反応に対する母親の認知に関連して、【第1子の第2子に対する理解・関心は低いと思った】は、妊娠中に話してあったにもかかわらず、実際に第2子を見たとき関心を示していない第1子の様子を見て、関心を示さない理由を、わかっていない、やきもち、我慢のせいなどと推測している母親の気持ちを表していた。天富ら(1981)は、「母親の入院によってある日突然他家で保育を受けることになった1~2歳児は、再会時において年長児に比し、赤ちゃんを無視したり、無関心だったり、又母親に対しても素直な愛着を示さなかったりなど戸惑いの態度を見せる子供が多い」と述べている。本研究における調査協力者は出産時、第1子は3歳未満の低年齢児が多数を占めていたため、母親の妊娠・出産による入院に対する理解が不明瞭の中で、急に母親と分離を強いられることとなり、天富(1981)の研究と同様の結果が示されたのではないかと考えられた。【入院中は離れて寂しい思いを示す第1子を優先しようと考えた】は、分離

によって我儘を我慢してつらい思いをしている第1子への気持ちに思いを寄せ、入院中ということで、第2子の世話を全部引き受けなければならない条件でもなく、経産婦では保健指導などにとられる時間も少なかったので余裕もあって、ともかく第1子優先に愛情をかけようと思う母親の心情を表していた。「母親が施設分娩を決定した際の不安は高く、75%が長子の事で何らかの心配をした」という天富ら(1981)の結果の背景を表していると思われた。第2子を出産するまで愛情を一筋にかけてきた第1子に対する母親の思いは強く、その思いを分娩入院中に果たせる条件にもめぐまれていたと言えるのではないだろうか。こういう母親の対処は、第1子のストレスを緩和する上で大切な対応であると思われ、助産師も母親がそういう対処をしやすい環境を作って推進できるようにしていく役割があると考えられた。

退院後に抽出された、【我儘を中心とする予想外の第1子の反応に追い詰められる思い】は、第1子が示す余りにもひどい我儘にどうしたらよいかわからなくなって追い込まれたり、第1子が退院後に示す様々な予想外の反応に驚かされたり、その結果として、第1子の示す余りにひどい我儘に、自身をコントロールできず、叩いたり怒鳴ったりしてしまい、自分に情けなく追い詰められてしまった苦しい母親の心情を表していた。小島ら(2001)の、「退院直後から産後1か月目にかけて「叱る」の頻度が有意に増加した」という報告があるものの、先行研究において、このような母親自身の口で語られた第1子の示す反応に関する母親の気持ちを表す報告は見られていない。第2子を出産して退院後直面する母親の苦しい思いを本研究において見出すことができた。母親の追い込まれる心情と同一ではないにしても、大月ら(2002b)は、「家族の適応に否定的な影響があると考えられる消極的拒否である『負担感』という認知は、第1子の『攻撃的行動』に対するものが多く、『アタッチメント行動』の主体者の疲労が高まってくると、十分に対応できなくなり、『負担感』が強くなっていくことが示唆された」と述べている。母親が追い込まれるようなストレスフルな状況は、虐待につながる危険性も孕みアタッチメント行動にも影響する可能性を示唆している

と思われた。

【第1子の精神(心理)状態は母親の愛情や関わり方で変化する】は、母親が、第1子の我儘を中心とするさまざまな反応について、反応の裏には母親の愛情不足があると感じ、母親が第1子の気持ちを汲んで、愛情をかけてあげれば、第1子に変化する認識に至る過程を表していた。小島ら(2001)は、「母親が第1子の行動や内的状態をまだ生まれて間もない第2子に説明する家庭ほど第1子は母親への依存や攻撃性を導きにくい」という結果を導き出し、「第2子には母親が話す内容を理解できなくても“私(母親)はあなたのことをちゃんと見ていますよ”というメッセージを第1子に発信していることになるのだろう」と考察している。第1子の立場に思いを寄せることは第1子へ何よりのメッセージになると思われた。

【2児の育児を両立できないジレンマ】は、2児の育児は負担が多く思い通りにできない難しさを感じて悩んでいる、そして1人だけの時とは違い2人の育児は中途半端で満足できないと感じている母親の苦しい心情を表す認知を示していた。「母親は子どもの思いに十分に寄り添うことが出来ずに、ジレンマを抱えている」(宇野ら, 2010; 須藤ら, 2007; 山崎, 2003)の報告があり、本研究においても、2児の育児は負担が重く中途半端になり満足できていないと認知している事が明らかになった。母親が困難だと感じる第1子の反応や母親の対応についての情報を提供し、母親が幼児期の子どもの成長発達過程や特徴を理解したうえでの関わりの必要性が示唆された。

## 2. 第1子の示した反応に対する母親の対応

妊娠中に母親は、赤ちゃんができることを第1子に伝え、第1子が第2子を受け入れてくれるような働きかけを行い、今まで第1子だけで過ごした親子の関係に第2子が入ってくることによる第1子の気持ちを考え、第1子優先ですべてを受け入れようと考えていることが明らかになった。天富ら(1981)も、「赤ちゃんの出生を予め知らせた母親は92.2%で、ほとんどの母親が妊娠中に第1子に第2子が生まれる事を伝えた」と報告し、「75%の母親が長子のことを心配し、“赤ちゃんの出生を知らせる”“母親の入院を話す”“その間他

家に預ける事を話す”など言葉での説明や説得もされている」と報告している。須藤ら(2007)も、「母親にとって第1子が第2子を受容してくれるかどうかは大きな心配事であった」と述べており、大月ら(2002a)も、妊娠中の第1子の反応として、「母親のお腹を触るなどの“第2子への関心”がみられたが、これは母親が“第2子受容準備行動”として促していたため」と述べている。本研究では、妊婦健診と一緒に連れて行きエコーを見ながら視覚的に赤ちゃんの存在を伝えたり、お腹に触れさせたり、お腹に話しかけてあげると声をかけたりなどの母親の働きかけがあったが、第2子を第1子に受け入れてもらえるように働きかけることは、多くの母親が心をくわいていることだということが改めて浮き彫りになった。そしてこのカテゴリーにおける3つ目のサブカテゴリー〔第1子優先に甘えさせた〕は、妊娠中の第1子に対する母親の認知で「かまってやれない第1子を心配し全部受け入れようと思った」を行動に表していると考えられる。山崎(2003)は、「胎児はたしかにすでに家族の一員ではあるけれども、母親はどちらかと言えば“おなかの子よりも上の子”の方を気遣い生活していた」と述べている。また、「まだ見ぬ胎児より<生活の中心は第1子>に関する話題が中心」(磯山, 2010), 「第2子の胎児よりも第1子を気にかけて7割以上の母親が第1子の退行現象のことを心配していた」(磯山, 2014)など、多くの調査結果も妊娠中の母親の対応としてお腹の子よりも第1子優先という妊娠中の母親の特徴が共通であることを示した。

分娩入院中における第1子の示した反応に対する母親の対応に関するカテゴリーとして【第1子の気持ちに配慮し寄り添う対応】が抽出され、母親と離れて生活している上の子が我慢していることに配慮し、面会時には何はおいても第1子優先で、第1子の寂しい気持ちや我慢している気持ちに寄り添って対応しようとしていることが明らかになった。分娩入院中の母親の気持ちに焦点を当てた研究は少なく、先行研究と比較がしにくいのが、妊娠中と同様に第1子優先で気持ちに寄り添おうとする母親の心情を表しており、分娩入院中はその継続線上で、赤ちゃんにまだすごく手を取られる時期でもないのに、余裕もあり、お腹の子ども、

あるいは生まれたばかりの子どもよりも、今までずっと愛情を注いで交流してきた第1子のことを気かけ、手をかけられる条件にあるのだろうと考えられた。一方、入院する母親と別れる経験を強いられる第1子の経験に関して、Bowlby(1997)が「母性的人物との分離は2歳以上の子どもたちに悲しみと怒りと不安をもたらす、そしてそれ以下の子どもたちにも多少とも漠然としたストレスをもたらすので、母性的人物からの分離そのものが、子どもの情緒と行動を決定する最も重要な因子だと言える」と述べ、宇田(2002)も、「子どもの心の動きを受け止め、理解し、それに沿った対応やしつけが行われると、子どもは情緒面が安定し、自己統制(我慢する、聞き分ける、待つ)を身に着ける」と述べている。乳幼児である第1子にとって母子分離は危機的な状況であることに鑑み、第1子の心情を汲み取り、それに応じた対応を行うことで第1子は落ち着きを取り戻し情緒的に安定すると考えられ、母親と面会に来た第1子が、ゆっくりこころの交流ができるように、助産師としても分娩入院中の面会時間や環境への配慮などに心を砕くことが大切であることを考えさせられた。

退院後における第1子の示した反応に対する母親の対応に関連して、【感情を抑えられない】は、精神的に余裕がない時に今まではしなかった第1子を叩いてしまうという衝動を抑えられなくて後悔する母親の心情、また同じように、精神的・身体的に余裕がなくなると、上の子を怒鳴ってしまう母親の対応を表していた。第1子の我儘に対する母親のこういう心情を背景にした対応については、先行研究が少なく、第2子を出産した後の母親の現実を表す結果として貴重であると考えられた。保田ら(2011)は、「母親に余裕がない時に、第1子が<だだをこねる><反発する><おもちゃのように扱う>などの反応を示す場合には困難を感じ、〔余裕がない時は一旦放っておく〕〔余裕がない時は第1子を叱責する〕などの〔一時的に第1子の行動を拒む〕対応をする」と述べており、本研究の結果は、もっと具体的に母親が自分自身が自分をコントロールできずに、叩いたり怒鳴ったりして、その後後悔して第1子に謝ったりする日常の母親の悩みや苦しみ的心情を明らかに

した。山崎（2002）は、第2子出生の母親に限定していない育児期の女性への質的研究の中で、「女性が健康的に過ごすには“子どもと離れた時間をつくる”」カテゴリーを抽出している。家族や地域の支援によってそういう母親と子供が孤立しないように働きかけることが重要であることを示唆していると考えられる。【愛情を注げるように工夫する】は、第1子の示す我儘な反応をできるだけ穏やかにするために、第1子の心情に配慮して、第1子を褒めて肯定したり、二人だけの時間を作ったり、2人の子どもに平等にバランス良く愛情を注ごうとしたりと努力している母親の対応を表していた。Rubin（1997）は、子どもは家族が増える事に対して、「喜びや特権を失ったり諦めたりすることへ根強く抵抗する。自分たちの子どもたちにそうした剥奪を受け入れさせるという事実の母性課題は、赤ん坊が生まれた時に熱心に始められる」と述べている。こうした母親の働きかけは、第2子出生によってストレスを受けている第1子にとって、意義あることだと思われた。【どう関わればいいのかわからない】は、2人目が生れたことによって、育児の負担が増えて母親の気持ちとしては2人にきちんと関わりたいと思いつながらできないでいる不全感や、心理的な余裕を失っている中で、第1子の示すさまざまなネガティブな反応にどう対処したらよいかわからない知識不足もあって対処不能に陥り苦悩している母親の対応が示された。大久保（1996）は、「親になっていく人にとっては自分の解釈に基づく当たり前の行為が第三者によって保証される事が重要である。親にとって子どもがわかれば自信を得ることができるが、分からなければ不安になるという両価性を免れる事が出来ない」と述べている。本研究でも「自分だけで考えても答えは出ないし合っているかもわからない」という意見があり、2児の育児を行う中でより良い育児方法を模索している母親の姿がみられた。母親が自身の悩みを相談でき、自身がやっていることを第三者から保証される事で育児に対する自信を高められる関わりが重要であろうと考えられた。少なくとも分娩で入院している間に、第2子出生に伴って生じること、その背景、どういう関わりが必要かなど、基本的な事柄について専門的な知識提供を受けることの

重要性が示されたと考える。

### 3. 欲しかった支援

事前に専門職者から根拠に基づいた正しい知識を教えてほしいこと、退院後も困った折々に自分の子どもにあった知識を補充してもらったり相談に乗ってもらえる機会や場所が欲しいと思う母親のニーズが示されていた。具体的には今後新しい家族を統合する中で起こり得る第1子の反応、第2子の育児に資する情報、2児の育児を行う上での関わり方などの知識を欲していた。聞き取りの中でも、経産婦の持つニーズに応えられていない臨床現場の現実も語られていたことから、経産婦は育児の経験があるから大丈夫と捉えるのではなく、経産婦の第1子に対するきょうだい関係に対する悩みの深さを考えるときに、積極的に専門職が母親のニーズに応えていくべきであることを示していると考えられた。

また、退院して地域に戻った後でも、経産婦として困った時に助けてもらえる場所や、2人の子育ての知識を補充したり相談に乗ってもらえる場所や人についての情報を広く提供してほしいというニーズを示していた。「妊産婦は退院後も育児に不安を感じ病院あるいは助産婦に対して産後の支援を求めている」（園田，2007；濱松，2001）と同様の結果であったと言える。その他、身近で気軽に2児をつれて遊びに行ける場所、または一時保育をしてもらえる場所が欲しいというニーズと、専門家に相談するほどの大きな悩みではないかもしれないが日常生活の中で浮上した不安や心配を、その都度気軽に相談したいというニーズを示していた。「経産婦は子どもが3歳時点において「自分の時間がない事の悩みが大きかった」（唐田ら，2007）、「経産婦は育児解放ニーズが育児のネガティブな側面（育児不安・抱え込み的態度）と関連している」（芝原ら，2003）と述べているように、1児の育児の時と比較して、経産婦は2児の育児におわれて自分の時間が持たず、精神的にも身体的にも負担が大きいことが報告されている。「子どもを一時的に預けることは母子双方にとって肯定的な意味を持っている」（柏木，2001）、「産褥早期の女性の疲労が子どもたちそれぞれに余裕をもって接することを難しくしますま

す悪循環し、涙を流すほどの体験として語られた」(山崎, 2003)と述べているように、今回分析された母親たちのニーズを満たすことは、心身にゆとりをもって2児の育児を行うことにつながり、未来を担う子供たちの健やかな成長のためにも、少子社会を少しでも改善するためにも、今後行政の取り組むべき重要な課題であろうと考えられた。また大月ら(2002b)は、「外出規制が認められると第1子に『攻撃的行動』が認められることが多く、第1子の外遊びが保持されると『攻撃的行動』はあまり認められず、外出規制は、母子双方に影響を及ぼし第2子出産後の家族ストレス減として大きな意味を持つ」と述べ、そういう場所の確保は健やかな母子育成のために喫緊の課題であることが示唆される。友達や同じ経験をしている母親同士で情報の交換を行ったりアドバイスを貰うことも効果的であると考えられる。そのような交流場所の提供も必要であると考えられた。

## VI. 結論

今回の研究を通して、第2子を妊娠・出産・育児する母親の思いや現実的な課題が明らかとなった。臨床現場において、経産婦は育児の経験者として扱われ、保健指導等において蚊帳の外に置かれることが日常的に行われている。困っている母親の苦悩を知り、今後の自分の専門職としての活動に積極的に生かしていきたい。

## 謝辞

本調査に真摯にご協力いただきました第2子出産後のお母様方にこころから感謝申し上げます。また調査実施にあたってさまざまなご配慮をいただきました淡路市教育委員会様、子育て学習センター職員の皆様に深甚から御礼を申し上げます。

## 文献

天富美彌子, 水野幸子, 馬場敬直(1981): 弟妹出生における長子の生活の変化と反応について, 小児保健研究, 40(6), pp.517-521.  
 天富美彌子(1984): 同胞葛藤に関する研究—一次子出生による長子の反応と親の養育態度との関連—, 大阪教育大学紀要第II部門, 32(2・3), pp.145-157.

Carol Kendrick and Judy Dunn (1980): Caring for a Second Baby: Effect on Interaction Between Mother and Firstborn, *Developmental Psychology*, Vol.16, No.4, pp.303-311.

濱松加寸子(2001): 妊産婦の病院勤務助産婦に対する期待 アンケート調査を通して, 母性衛生, 42(1), pp.269-272.

深澤怜紗, 岩立京子(2013): 次子出生における長子の変化としての葛藤反応 長子や次子の性別・年齢差・気質との関連から, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 64(1), pp.85-94.

福井トシ子(2012): 新版 助産師業務要覧 第2版, 336p, 日本看護協会出版, 東京.

保田ひとみ(2004): 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応, 日本助産学会誌, 18(2): pp.9-20.

保田ひとみ, 坂井明美, 畑下博世(2011): 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応に対する母親の対応, 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要, 19(1), pp.57-65.

磯山あけみ(2010): 第2子妊娠中の女性の子育てに対する主観的体験, 日本母性看護学会誌. 10(1), pp.17-23.

磯山あけみ(2014): 第2子妊娠中の母親の育児意識および特性との関連, 母性衛生 55(2), pp.434-443.

唐田順子, 森田明美(2007): 乳幼児を持つ母親の子育てに関する困りごとや悩み事に関する研究—一児の年齢別, 初経産婦別による検討—(2007): 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 7, pp.249-263.

柏木恵子(2001): 子育て支援を考える 変わる家族の時代に, p63, 岩波書店, 東京.

小島康夫, 入澤みち子, 脇田満里子(2001): 第2子の誕生から1か月言までの母親—第1子関係と第1子の行動特徴, 母性衛生, 42(1), pp.212-221.

小島康生, 入澤みち子, 脇田満里子(2003): 第二子妊娠期間中における母親—第一子関係, 母性衛生, 44(2), pp.289-299.

小島康生(2007): 二人の子どもがいる母親に特有の育児困難感とその背景要因—4か月齢の第二子を持つ母親と19か月齢の第二子を持つ母親の比較を通して, 小児保健研究 66(6),

- pp.821-831.
- Kreppner K (1988) : Changes in Parent-Child Relationships with the Birth of the Second Child, *Marriage & Family Review*, 12, pp.157-181.
- 黒田実郎 (1997) : ボウルビィ母子関係の理論分離不安, 500 p, 岩崎学術出版社, 東京.
- 中村紋子, 片岡弥恵子, 堀内成子, 土屋麻由美, 中村しのぶ, 矢島千詠 (2006) : 新しく兄弟になる子どもと家族のクラス「赤ちゃんがやってくる」の実施と評価, *日本助産学会誌*, 20 (2), pp.85-93.
- 野嶋佐由美 (1996) : 家族看護学—理論とアセスメント—, へるす出版, pp.89-92.
- 大久保功子 (1996) : 初めての子どもを持った夫婦の出産後3カ月感の経験世界—親になる事(1), *神戸大学医学部保健学科紀要*, 12, pp.85-93.
- 大月恵理子, 森恵美 (2002a) : 第2子出生前後の第1子の反応と家族の認知, *母性衛生* 43 (2), pp.332-339.
- 大月恵理子, 森恵美 (2002b) : 第2子出生に伴う家族の適応過程, *日本助産学会誌*, 2(2), pp.31-40.
- Ramona T. Mercer J (2006) : *Obstet Gynecol Neonatal Nurs*, Sep-Oct, 35 (5), pp.568-582.
- Rubin, R, 著. 新道幸恵, 後藤恵子訳 (1997) : ルヴァ・ルービン母性論—母親の主體的体験, p73, 医学書院.
- 芝原宜幸, 橋本栄里子 (2003) : 0-3か月時を持つ母親のニーズの構造についての一考察—地域保健センターにおける育児支援を念頭に据えて—, *日本橋学館大学紀要*, 2, pp.27-40.
- 園田かおり (2007) : ある経産婦の出産体験からニーズを探る, *神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録* (32), pp.220-225.
- 寺村ゆかの (2012) : 産後家庭訪問の今日的意義と課題—ある産科施設で出産した女性対象の調査を通して—, *神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要*, 6 (1), pp.103-115.
- 宇野晴美, 浅野育代, 大島多恵, 森田真美, 磯山あけみ, 林けいこ (2010) : 第2子出生に伴う第1子の反応と母親の感情, *茨城県母性衛生学会誌*, 28, pp.25-30.
- 宇田倫子 (2002) : 第2子出産に際する第1子の心理を支える, *ペリネイタルケア* 21(9), pp.14-17.
- 山崎あけみ (2002) : 育児の家族の中で「家族」と「女性」に健康的な生活をもたらすプロセス, *看護研究*, 35 (6), pp.517-533.
- 山崎あけみ (2003) : 3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセス, *日本助産学会誌*, 17 (1), pp.35-46.